「JGAゴルフジャーナル」AUG. 2022 Vol.111

JAPAN GOLF ASSOCIATION

JGA Golf Journal

JGA 公益財団法人 日本ゴルフ協会

スポーツくじ toto BIG
スポーツ振興くじ助成事業

特集1

池谷正成新会長インタビュー

すべてのゴルファーのために活動するJGAを目指す

6月24日に行われたJGA「2022年度第2回臨時理事会」において副会長を務めていた池谷正成氏が会長に就任した。日本ゴルフ界のさらなる発展のため、どのようなかじ取りをしていくのか。思い描く展望を聞いた。

――会長就任にあたっての抱負をお聞かせください。

池谷　この度退任された竹田前会長は、JGAを時代の趨勢に合わせた組織とするために定款の変更や組織改革、競技者育成強化など、さまざまなことに取り組まれてこられました。私はそれらを引き継ぎつつ、歴史あるJGAとゴルフ界発展のために全力を尽くしてまいります。

――これまで企業のトップや関東ゴルフ連盟理事長などの役職を歴任されています。その経験が活かせるのではないでしょうか。

池谷　いろいろな問題に直面して、その度にどうにか乗り越えてきた経験はあります。JGAにもさまざまな課題がありますので、在任中に少しでもその課題を解決していきたいと考えています。

ガレス・ジョーンズヘッドコーチ率いるJGAナショナルチーム

中島啓太

橋本美月

――現在、JGAが抱えている課題を具体的に挙げていただけますか。

池谷　まず、財政基盤が心もとないということがあります。JGAに求められる期待はたくさんありますが、それらすべてに応えていくためにもしっかりとした財政基盤が必要です。たとえば、JGAが取り組んでいることのひとつに選手の発掘・育成・強化があります。特にここ数年は世界で通用する選手の育成に力を入れており、昨年はアジア・パシフィックアマチュア選手権男子で中島啓太選手、女子では橋本美月選手が優勝。オーガスタナショナル女子アマでは梶谷翼選手が勝ち、世界の舞台で日本の選手たちが素晴らしい結果を残してくれました。今年5月に行われたクィーンシリキットカップアジア太平洋女子招待チーム選手権でも日本が20年ぶりの優勝。2015年にガレス・ジョーンズ氏をJGAナショナルチームのヘッドコーチに招いてから着実に成果をあげています。今後、さらに活動を充実させていくためには資金が必要。どのように集めていくのかが当面の課題になっています。

――財政面ではゴルフ場利用税の有効活用が、ひとつのポイントになるのではないでしょうか。

池谷　現在、ゴルフ場利用税として年間400億円を超える額をゴルファーが支払っています。私たちは完全撤廃を目指した運動を長年行ってきましたが難航しているのが現状です。ゴルフ場がある市町村にとってゴルフ場利用税は貴重な財源ですから撤廃されれば困るという事情もある。完全撤廃が不可能ならば、ゴルフ界、スポーツ界に一部を還元していただき、普及振興に活用できるような仕組みを構築できないかと模索しているところでもあります。私たちが頑張ってゴルファーを増やせば市町村の税収も増えるわけですから、お互いにとって良い形をつくれるように努力を続けてまいります。

――普及振興という言葉が出ましたが、JGAでは昨年、定款を改訂して事業について記した第2章第4条の一番目に「ゴルフの普及と振興に関する活動の実施」を据えました。池谷新会長の元でどのように普及振興を推し進めるのかも注目されます。

池谷　ゴルフ振興推進本部を新設して幅広くゴルフ振興に努めていく体制を整えました。これまでのJGAは競技の主催が大きな事業であった経緯があります。もちろん競技は非常に大切ですし、広い意味でゴルフの活性化や普及振興につながるものでもあります。ただ、競技ゴルファーは全体からみれば一部にすぎません。もっと幅広く、ゴルファー全体を見据えた普及振興に目を向けるべきだという話がここ2年ほどで出てきまして、ゴルフ振興推進本部を発足させたわけです。具体的な事業への落とし込みはこれからですが、これはJGAのひとつの大きな方針転換だと思っています。

――このところ、ゴルファーの数が増えてきているようですね。

池谷　バブル崩壊以降、ゴルファーの数は減少していました。一時は最盛期の半分くらいに減ったとも言われていたほどです。ゴルフ場も倒産するところが出ていました。そんな中で2年前に新型コロナウイルス感染症が広がり、旅行や食事に行けない状況が続きました。ゴルフは屋外の新鮮な空気の中でプレーできますから感染リスクが少ない、良い運動にもなるということでゴルフへの関心が高くなっています。その関心や期待の高さがゴルフ人口の増加という形になって表れたのではないでしょうか。特に女性や若い方が新たにゴルフを始めるケースが非常に増えている。ゴルフ用品の売り上げも伸びています。ゴルフ業界全体が盛り返してきているわけです。こういう時期にゴルフ振興推進本部を通じてゴルフ業界のさらなる活性化の一助になれればと考えています。

――2年後、2024年にはJGA100周年を迎えます、良い形で節目の年を迎えたいですね。

池谷　いつの間にか100年ですね。ただ、初期のゴルフは一部の限られた人だけのスポーツ。本当の意味でゴルフがみんなに親しまれるようになってからはその半分程度の年数しか経っていないのではないでしょうか。

――時代とともにJGAに求められるものも変化してきていると思います。これからのJGAのあるべき姿をどのように描いていらっしゃいますか。

池谷　JGAは1924年に7つのクラブ（ゴルフ場）が集まって組織されたという生い立ちがあります。つまり、クラブが元になっているわけです。ですから、これまではクラブを中心に据えた運営をしてきたという歴史があります。ただ、ゴルファーはクラブのメンバーだけではありません。先ほど申し上げた新たにゴルフを始めた女性や若い方の多くはクラブに入会されていないと思います。ひとつ例を挙げますと、ハンディキャップインデックスを個人で取得する方がこのところ増えてきているというデータがあります。ハンディキャップインデックスはクラブのメンバーでなくても取得可能。現在はゴルフ情報サイト（楽天GORA、ゴルフダイジェストオンライン）からでも取得できますし、今年4月からJGAも世界共通のワールドハンディキャップシステムを稼働させたことが追い風になったかもしれません。5月はクラブに入会されていない、いわゆるノンメンバーの方の取得数が過去最高でした。ハンディキャップインデックス取得者数は今年中に72万人という目標を立てていますが、それはクリアできそうな勢いです。これだけ若い方たちにもゴルフが広がっている現状を鑑み、クラブだけに目を向けるのではなく、いわゆるノンクラブメンバーの方々を含めたゴルファー全体と向き合っていくのがJGAのあるべき姿だと思いますし、実際にそのような組織に変わってきていると感じています。

日本ゴルフ界発展のため
課題と展望を語る池谷正成会長

――新たにゴルフを始める方は初心者同士のグループでプレーするケースが多いと聞きます。そうすると経験者からゴルフ場でのマナーを学ぶ機会がありません。こういう方にどうマナーを教えるのかも課題になるのではないでしょうか。

池谷　それについてJGAではゴルフ初心者のみなさんにゴルフ場ではどのように行動すれば良いのかを伝えるための動画を作製し、公開しております。今後も新たな動画をつくり、初心者の方にも安心してゴルフ場や練習場に足を運んでいただけるサポートをしていく予定です。昔は先輩方からマナーの指導を厳しくしていただきましたが、今はそういうことも少なくなっているようですね。ですからマナーが悪いという以前にゴルフ場でのマナーがどういうものか分かってない方もいらっしゃる。ただ、ゴルフのマナーはそれほど難しいものではないんですよ。ひとことで言うと「周りの人に迷惑をかけない」ということ。たとえばバンカーをならさないと次にそこに入った人に迷惑をかけてしまいます。みんなが楽しくプレーするためにはそういう気づかいが大事。これは社会生活にも欠かせないこと。そういうことを学べるゴルフは素晴らしいスポーツだと思いますよ。プレースタイルはセルフが増え、ナビゲーションシステムがカートに設置されたり、距離測定器が普及するなど変化してきていますが、マナーの基本は昔から同じ。みんなで身につけたいものです。

――組織の運営に目を転じますと、JGAなどの中央競技団体はスポーツ庁が策定したガバナンスコードに則ることを求められるようになりました。各団体はそのための改革に取り組んでいますが、JGAはいかがでしょう?

池谷　ガバナンスコードでは運営の透明性を確保するなど、さまざまな要求がなされています。その中のひとつに「組織の役員及び評議員の構成等における多様性の確保を図ること」という項目があり、「女性理事の目標割合（40%以上）を設定するとともに、その達成に向けた具体的な方策を講じること」と記されています。JGAにおける女性理事の割合は徐々に増えており、今年6月の役員改選前は約20%だったものが改選で約30%となりました。2年後の役員改選時には40%の目標を達成する予定です。最近、女性ゴルファーが増えているとはいえゴルファー全体における割合は20%足らずと、まだまだ少ないのが現状です。女性理事が増え、女性の目線から女性ゴルファーを増やすための方策をいろいろと提案していただくことを期待しております。ただし、体裁を整えるためだけに女性理事を増やすのではなく、実際に活躍していただかなければいけない。そのためには女性理事になるための人材を育成していくことも大事だと考えています。

――やるべきことはたくさんありますね。

池谷　はい。利害関係者とのゴルフ禁止条項が盛り込まれた国家公務員倫理規程の見直しも引き続き強く要望していかなければなりません。何をするにも、冒頭で申し上げたようにまずは財政基盤をしっかりとさせる必要があります。それに、JGA自体の組織の活性化も必要です。JGAの事務局は20人強ほどの小さな所帯です。公益財団法人ですから求められるものは大きいのですが、持っている力とマッチしているとはいえません。少しでも期待に応えるためにも、わずかな人数でも効率よく成果をあげられる組織にしていきたいと考えています。先ほども出ていましたが、2024年にJGAは創立100周年を迎えます。私たちはそれをひとつの節目とし、ゴルフという素晴らしいスポーツが将来にわたって持続可能なものであり続けるよう、すべてのゴルファーのために活動してまいりますので、皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

高齢の参加者にゴルフで健康を

R&Aが5年間の研究結果を発表。ゴルフの健康増進効果が明らかに

世界的に危惧されている運動不足による健康衰退。そのような中で、このほどR&Aが「ゴルフと健康」をテーマとした研究結果を報告書としてまとめ、高齢の参加者がゴルフをすることの健康上のメリットを明らかにしました。R&Aがこの研究をサポートしている理由、研究結果についてなど、ドミニク・ウォールR&Aアジアパシフィックディレクターから話をうかがいました。

Dominic Wall

Q 研究テーマに「ゴルフと健康」を選択した理由は?

ドミニク氏:一般の方、医療従事者、そして政治家の方々が水泳、サイクリング、テニスなどのスポーツが健康に良いという認識を持っているのはよく知られていますが、ゴルフは健康に良いという認識があまり受け入れられておらず、また、それを裏付ける医学的、科学的研究が十分ではありませんでした。

2016年、R&Aはワールドゴルフ財団のパートナー(DPワールドツアー、USGA、PGA of America、LPGA、Augusta National Golf Clubなど)と共に、ゴルフの健康効果に関する研究者のために資金提供やその他の共同作業を行いました。これは、世界保健機関(WHO)が、世界の多くの地域で運動不足に関連する疾病が蔓延していることから、スポーツによる行動を呼びかけたことも一因でした。

「ゴルフと健康に関する報告書」は、過去5年間の研究を簡単にまとめたものです。

Q どのような研究機関と協力して、どれほどの時間を費やしたのですか?

ドミニク氏:この研究は、アンドリュー・マレイ博士(エジンバラ大学、現DPワールドツアー CMO、R&Aメディカル&サイエンティフィックアドバイザー)とロジャー・ホークス博士(元DPワールドツアー CMO)が主導して行われました。

マレイ博士は、世界有数のスポーツ医学専門誌であるBritish Journal of Sports Medicineに、ゴルフとウェルビーイングに関する5,000件の研究を調査したスコープレビューなど、多くの科学論文を発表しています。そのレビューの主な結果は、ゴルファーは長生きする(非ゴルファーより5年長い)こと、ゴルフは多くの慢性疾患の予防に役立つこと、そしてメンタルヘルスを改善し、社会的ウェルビーイングを高めることができることを強調しています。これとは別に、R&Aはサウサンプトン大学と南カリフォルニア大学の体力とバランスに関する研究にも資金を提供しています。

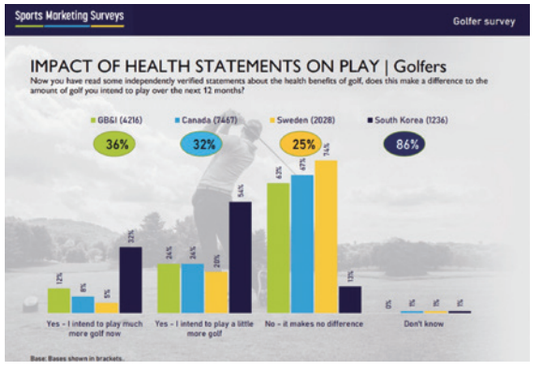
この研究により、ゴルフは筋力とバランスの向上という形で、高齢の参加者に大きな健康上の利益をもたらすことが明らかになりました。

この研究は、メンタルヘルスと健康、怪我と怪我の予防、障害を持つゴルファー、身体的準備、スポーツ科学と栄養など、さまざまなテーマで世界各地で研究・協力が行われています。

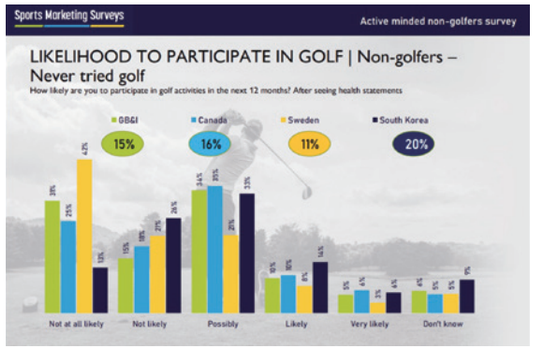
Q イングランドにおけるゴルフ人口(年齢層)、国民の健康に対する意識はどのようなものですか?

ドミニク氏:添付資料をご覧ください。

平均年齢は41歳です(コース内ゴルファー全体、登録ゴルファーはもっと高い)。英国の人々がどの程度健康志向なのか、お答えすることはできませんが、ゴルフと健康についてどう考えているかはお伝えできます。



資料抜粋:イギリスの36%の方が『ゴルフと健康』をみて、ゴルフを行う回数が増加したと回答



資料抜粋:イギリスにおいて、ゴルフをやったことのない方が『ゴルフと健康』をみて、15%の方がゴルフをやってみようと思ったと回答

Q 研究の結果、ゴルフが健康に与える良い効果について、教えてください。

ドミニク氏:個人的な観点も含有されますが、ゴルフをすることで、体全体のフィットネス、特に有酸素運動ができるようになりました。ゴルフをすればするほど、生活の他の面でもエネルギーが湧いてきますし、一般的に強くなったように感じます。また、ゴルフをすればするほど、そしてその結果として体力が向上すればするほど、ゴルフはより良いものになるのです。

ゴルフをすればするほど、仕事や他の問題から解放され、リラックスして自然を楽しむことができるので、精神的にも健康にもつながります。

写真提供:R&A

Q 5月の来日時にはスポーツ庁にも訪問をされました。

ドミニク氏:スポーツ庁の担当者にお会いし、非常に前向きな会談をもちました。私は、ゴルフと健康にとって多くの利点があることを明確にご説明し、日本でこれを推進するための私たちの考えをご説明することができました。

日本は世界一の高齢者大国であり、百寿者の数も多いので、高齢者がゴルフをすることには大きなメリットがあると考えております。そこで重要に感じたのは、スポーツ庁が、ゴルフと健康のメリットを伝えるためには、高齢者だけでなく、国民全体に向けたメッセージを発信すべきであると述べていることです。そうすれば、より多くの若い人たちがゴルフに魅了され、その恩恵が長年、中長期にわたって効果を発揮すると考えられます。

Q R&Aが日本以外でこのレポートを展開するためにアプローチしている国や地域があれば教えてください。

ドミニク氏:ウェールズでは、ゴルフと健康キャンペーンのパイロット版を実施しており、その後、教材の展開を検討しています。

市場調査は、イギリス、カナダ、スウェーデン、韓国でも実施しました。

Q ゴルファーに一言お願いします。

ドミニク氏:ゴルフをすることは、身体の健康を維持するだけでなく、素晴らしい友人関係を維持し、自然の中でリラックスする大切な時間を提供してくれます。

ゴルフは、現代社会が抱える様々な問題を解決し、年齢を重ねても楽しく過ごすことができる、長期的な効果が期待できます。ぜひ多くの方にゴルフを楽しんでいただき、健康を維持していただきたいと思います。

東京オリンピック ゴルフへの想い

霞ヶ関カンツリー倶楽部でのトップアスリートによるメダルをかけた激戦から1年あまり。
その熱戦は、私達の中に鮮やかな記憶として残されています。この東京五輪ゴルフ競技の開催は、
新型コロナウイルスの影響で史上初の1年の開催延期や無観客開催など、
誰も想像しなかった事態に見舞われる中、各関係団体が叡智を結集し、多くの困難を克服して
実現したものでした。当時、日本ゴルフ協会オリンピックゴルフ競技対策本部長を務めた
永田圭司顧問の東京五輪ゴルフ競技への思いを掲載します。

©IGF

オリンピックでのゴルフ競技復活と日本ゴルフ界の対応

2012年、ゴルフの更なる振興策として、世界のゴルフ界がオリンピック競技への復活を熱望し活動してきた成果として2016リオオリンピックからそれが実現する事が決定されました。一方で同時期、2020年大会の東京招致活動も、3候補地の一つに選定され最終実行計画（実行ファイル）の提出が求められ、ゴルフ競技会場も具体案を決定する必要がありました。

日本のゴルフ界としてこれらに対応する為、ナショナルフェデレーションである日本ゴルフ協会（JGA）にオリンピックゴルフ競技対策本部を設置し、メンバーには日本プロゴルフ協会（JPGA）、日本ゴルフツアー機構（JGTO）、日本女子プロゴルフ協会（JLPGA）、有識者の参加を得てオールジャパン体制で臨む事となりました。

対策本部に求められたミッションは大きく分けて2つ。一つは日本オリンピック委員会（JOC）と協力しての選手強化とメダル獲得のための支援。もう一つは東京オリンピックゴルフ競技実施に向けた諸準備にオリンピックゴルフ競技を主管する国際ゴルフ連盟（IGF）と東京招致委員会（のちに組織委員会）への協力、支援でした。

想像外の1年延期と無観客開催。不安と安堵、無念と感謝が交錯した2週間

こうしてスタートした東京オリンピックとの関わりですが、9年後に迎えた東京オリンピックは、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、一年の延期を経て、さらに開催さえ危ぶまれる非常事態宣言の中で、無観客での開催という想像だにしなかった事態となりました。「各国を代表するトップアスリートのパフォーマンスや、世界メジャー基準の大会運営を、できるだけ多くの方に直に全身で感じて欲しい。それが日本のゴルフ界にとってのレガシーそのものになる」との想いで準備してきただけに、無観客での競技開催は私自身の中でイメージをすることが出来ず、無念さと不安を抱いたまま開幕を迎えました。2週間にわたる競技はあっという間に過ぎて、最後には稲見萌寧選手の銀メダル獲得の表彰式で喝采を叫びたい反面、複雑でなんとも不思議な感覚でその様子を眺めていました。もし有観客だったら、この18番ホールはどんな興奮に包まれていただろうかという想い。コロナ禍という未曽有の状況下で無事終了出来たという安堵の想い。代表選手達の素晴らしい戦い、とりわけ日本代表選手の健闘が無観客という状況を越え感動的な

WORLD MAJOR STANDARDを目指し、
IGF芝管理コンサルタント デニス・イングラム氏と
コースコンディションについて、入念にミーティングをおこなった

写真提供:霞ヶ関カンツリー倶楽部

大会にしてくれた感謝の念。そしてもう一つ、幾つもの困難を乗り越えて素晴らしいコースと完璧なコンディションに仕上げてオリンピックゴルフ競技会場の重責を果たしていただいた霞ヶ関カンツリー倶楽部（以下KCC）への感謝の念。様々なことが込み上げて交錯していたのだと思います。

東京オリンピック開催決定。KCCがゴルフ競技開催コース第1候補に

振り返ると、東京オリンピック招致委員会（当時）から招致活動の最終実行計画（実行ファイル）の作成にあたり、JGAにオリンピックゴルフに相応しい会場の推薦依頼があったのが2012年でした。JGAオリンピックゴルフ競技対策本部東京準備委員会において検討に入りました。

与えられた条件として、開催都市東京の都心から50キロ圏内、競技を主管するIGFの要求する基準に副える事が示されました。

委員会では当初50キロ圏内のゴルフ場から50コースほどの候補を挙げ、そこから絞り込みを行いました。IGFの意向としてゴルフ4大メジャーに匹敵するもう一つの価値を持つ大会にしたいという希望も届きましたが、当時IGFにとってもオリンピック競技の開催基準は手探り状態でした。オリンピックにゴルフが復活すると言っても100年以上ぶりですから、誰にとっても初めての経験なので致し方ない事でした。幸いなことに、同時期にIGF主催の世界アマチュアゴルフチーム選手権が2014年に軽井沢で行われる事になっており、JGAとIGFは共同して準備にあたっていたので頻繁に連絡を取り合っており、オリンピックの開催基準についてもニュアンスを確認し合いながら作業を進めました。（現在はほとんど明文化されている）希望観客数、メディアセンターや放送センターの規模、アクセス、男女競技を2週間同一会場で行う、などの諸条件が見えてくると候補コースも自ずと絞られてきました。日本オープンなどの国内メジャー大会の施設規模の3倍ほどの諸施設を満たすには36ホールの敷地規模が必要になることも確認しながら、著名な専門家やプロゴルファーを含む委員会のメンバーの議論の末、「霞ヶ関カンツリー倶楽部」を第一候補とすることになりました。この間IGFとの間で頻繁に使われた“WORLD MAJOR STANDARD”という言葉（概念）が、後の苦労の元になっていきました。

この準備委員会の推薦に基づいて、招致委員会への答申、KCCへの依頼、そしてKCCでの受諾の機関決定、IGFの承認、IOCの承認とプロセスを踏んで、東京招致委員会の実行ファイルにゴルフ会場としてKCCが記される事になりました。

しかしこの時点では東京招致成功の確率は低いとされており、2013年9月に「TOKYO」が決定されるまで推薦の重みを実感してはいませんでした。

2020年大会の開催地が東京と決まると、運営の組織も東京招致委員会から東京組織委員会へ引き継がれ準備が加速しますが、KCCではかねてより計画され準備されていた東コース改修と言う大事業をKCCとして行い、オリンピックゴルフ競技を迎え入れる決断がされました。トム・ファジオ氏による改修は東コースの佇まいは残しながらWORLD STANDARD化されたものとなり、今回多くのトッププレーヤーの賛辞に繋がったと思います。

”WORLD MAJOR STANDARD”への苦悩

準備は着々と進んでいましたが、いくつかの課題も提起され、その対応に追われる時機も経験しました。女性正会員不在の問題解決にもKCCには英断をして頂く事になりました。しかしこの課題も時代の流れの中で避けて通れないものだったとも思っています。暑さ対策に関してはIGFの見解は当初よりゴルフは最も色々な対策を講じられるスポーツであり問題視しないことで一貫していました。しかし、“WORLD MAJOR STANDARD”を掲げるIGFと日本側の解釈の隔たりは準備が具体化するにつれ顕著化しました。先ず練習場が課題となり、ここでは練習場の持つ意味から双方の違いが浮き彫りになりました。IGFの300ヤード以上、25打席以上、競技コースと同一のコンデションなどの要求を満たすには、西コース18番ホールを当てる結論になりましたが、芝の張り替え作業まで含む為、大会期間中だけでは済まず長期間変則的な18番ホールの運用をお願いすることになってしまいました。IGFの要求はコースの練習場のあるべき姿ではありますが、立地条件の悪い日本のゴルフコースでは非常に難しく、日本ゴルフ界の今後の課題として残りました。

コースコンデションについても、数値や明確な言葉で表せないニュアンスを含んだ”WORLD MAJOR STANDARD“に悩まされることになりました。IGFから派遣されてくる競技運営担当者はUSPGAツアーの実務者達でしたので、彼らの持つニュアンスはそれを背景としたものでしたし、基準となるコンセプトを問うと、「それはプレーヤーにとってフェアであること」とまた抽象的な答えが返ってきました。キーワードの解釈が難しい上に元々言語の違いによるコミュニケーションの難しさもあり、お互いが歩み寄って作り上げていく作業は本当に大変だったと思います。

KCCの深い理解と全面的な協力が最高の舞台へと繋がる

結果として最高の評価を受けたコンデションに仕上げていただいたわけですが、やはり6月からの完全クローズにご協力いただいたKCCメンバーのご理解があっての事と思います。2ヶ月間でのコースコンデションの改善は目覚ましく、渋面だったIGF担当者のウィンクが忘れられませんが、グリーンキーパーはじめ、JGA加盟倶楽部にお願いしたコラボレーターの方達も含め現場の皆さんのご苦労の賜物であったと思います。

また、この時期、IGF側とも”face to face”のコミュニケーションがコロナ禍の制限の中でも増えた事、お互いのノウハウが現場で融合した事も大きく寄与したと考えられます。

そして間近で仕上がったコースを見てみると、曖昧だった「世界のメジャー基準」「フェアなコース」の意味も解ってくるように思われました。この体験はKCCにとっての財産であるのは無論のこと日本ゴルフ界にとっての財産になるものと感じました。

これらのことを考え合わせれば、2020東京オリンピックゴルフ競技は、緊急事態宣言の中で行われた状況下では、無事に競技を完遂し、日本のゴルフ界に多くの無形のレガシーをもたらしたことにおいて成功だったと言えると思います。

しかし、私には無観客で行われたオリンピックは、舞台と役者は揃えても大切なものを欠いた無念さの方が優っています。目に焼き付いているトッププレーヤーの空気を切り裂く異次元の弾道や、KCCのコースも直に見て感じて頂きたかったと残念でなりません。無観客になったことで中止された企画や交流も多くその面でも心残りは否めません。

デニス氏とコラボレーターによるフェアウェイの芝刈りについての打ち合わせ。
コミュニケーションの積み重ねが最高評価のコンディションにつながった

10番ホールでティーショットを打つ稲見萌寧

トップアスリートのオリンピックへの思いが特別な大会に

ゴルフ競技は予定を大幅に上回るTV放映がなされ、松山英樹選手がメダル争いした男子最終日のTV視聴率は20%を超え、稲見選手のメダル獲得時は17%という高視聴率となっており、日本全国でTVやネットを通して大きな応援があった事が伺えます。また、視聴者から「ゴルフは厳しいスポーツだと感じた」「屋外環境でできる素晴らしいスポーツだと思った」といった類のコメントも多くあったとも聞いています。ゴルフが正しくスポーツとして認知される上でも大きな機会となりました。

加えて、競技会場であるKCCに対しては参加選手達からも、コースの質、コンデションに多くの賛辞がありましたが、TV画面を通したKCCの美しさには、国内のみでなく世界中から、高い評価が寄せられており、KCCの素晴らしさも充分に発信出来たのではないかと思っています。

ゴルフやテニスでは、時折、オリンピックより4大メジャー大会の価値が高いと位置づける向きもありますが、銅メダルを争うプレーオフを戦ったマキロイ選手の

コロナ対策としてクラブハウスにて抗原検査を実施

レジストレーションにてサインを書く松山英樹

開幕前に霞ヶ関カンツリー倶楽部で練習ラウンドを行う日本選手団

世界最高峰の舞台となった霞ヶ関カンツリー倶楽部18番ホール

健闘をたたえ合う、松山、ローリー・マキロイ、ポール・ケーシー

日本ゴルフ界初となる銀メダルを獲得した稲見

「3位になるためにこんなに頑張った事はない。オリンピックのメダリストは全く別の価値を持つもの。次も代表になれるなら躊躇なくメダリストになる為に戦います」のコメントが全てを語っていると思いますし、稲見選手も、「トーナメント優勝とは全く違う注目度を実感している」とコメントしているように、オリンピックにおけるゴルフ競技は別次元の価値を持つものとトップアスリートにも定着していくと確信が持てました。松山選手は大会直前、アクシデントに見舞われましたが、「自国開催であり、思い入れのある“霞”ですから」と万全でない状態ながら最後までメダル争いを展開してくれました。星野陸也選手も強い思いで代表の座を勝ち取り、トップスタートの重責から最後まで諦めない戦いは立派でしたし、畑岡奈紗選手も早くから東京オリンピックを目標の一つに定め、綿密な計画で大会に臨み世界のトップランカーの実力を見せてくれました。稲見選手はクールなコメントの内側に並々ならぬオリンピックへの意欲を秘めて代表入りし、銀メダル獲得という快挙に結びつけてくれました。こうした選手の活躍を支えたのがオリンピックゴルフ競技対策本部に置いた強化委員会でした。

日本チームの活躍を支えた強化委員会。東京オリンピックでの活躍が次世代へ引き継がれる

委員長に倉本昌弘JPGA会長、副委員長に小林浩美JLPGA会長、代表チーム監督に丸山茂樹プロ、女子コーチは服部道子プロ、これにJGAサポートスタッフを加えた体制で支援策を検討してきました。IGFによる代表選手基準は、大会直前の6月末の世界ランキングをベースとして決定される事や、ツアープロによる個人戦という競技フォーマットを前提にすると事前の強化策には限界がある事から、主に大会期間中のベストパフォーマンスのためのサポートが綿密に検討され、暑さ対策、フィジカルケア、メンタルケアなど万全の準備がなされました。通常のツアー競技と違いプロの個人的コーチやサポートスタッフを帯同できない条件下では大きな支えとなったと思います。一方で長期的な視点で世界で戦える選手の育成強化も議論され、JGAナショナルチームも大きく変革されました。世界に通用する次世代の養成を目的とし、コーチとしての専門知識、スキルを持った外国人コーチを招聘した事で、すでにパリ大会に向けての有望な人材が数多く育つようになってきました。彼らにとっては今回のオリンピックは大きなモチベーションとなっていくと思います。

サポートをくださった全ての方へ感謝を

私自身は、JGAオリンピックゴルフ競技対策本部メンバーとしてスタートしたプロジェクトでしたが、自身が一人のメンバーであるKCCが開催コースとなったことで葛藤する局面も多々ありましたし、IOC、IGF、組織委員会、JOC、そしてKCC、と関係する多くの組織との調整の中で決定、承認のプロセスの複雑さに苦労した場面も多くありました。さらに政府の五輪相、東京都知事、超党派ゴルフ振興議連、スポーツ庁、マスコミなどへの説明も度々求められるなど、オリピックが桁違いのビッグプロジェクトであることを痛感させられました。その中で期待されていた役割がどの程度果たせたのか全く定かではありませんが、多くのサポートをいただいた全ての皆様に感謝しております。